

型を提示して、考えさせる特別支援（知的障害）学級における国語科授業

尾道市立栗原北小学校 大名克英

教師が文型・話型を提示することによって、ゴールのイメージを具体的にすることで、児童を意欲的に活動させることができた。児童はできたという達成感を味わい、自ら次のステップへと進もうとすることができた。この実践について、実践の趣旨・概要・成果と今後の課題の三点にまとめる。

1 実践の趣旨

文型を提示することによって、教師のねらっている文章と児童の目指そうとする文章が共有化される。また、文字を書くことが困難な児童にとっては、書かなければならない文章が具体で分かり、それが書けたかどうかの自己評価も容易にできる。達成感を味わうことが更なる学習へのステップとなることを期待し、本実践を行った。

私が担任する特別支援学級に在籍する児童は、文字を読んだり書いたりすることを苦手としている。担任として、文字を習得させることを中心に取り組んできた。その際に注意したことは、達成感を味わわせることである。繰り返し練習をさせ定着を図ることや意欲を喚起し学習に向わせる中で定着を図ることのバランスをとりながら、日々実践をしている。

文字を習得させるため、基盤としているのが読書である。本校では、毎朝読書の時間が20分間設定し、読書時間を確保している。そのため、本に多く親しませることができる。そのことも影響して、児童は読書が好きになり、読書を楽しむことができるようになった。（写真1・2）

これだけの量を読むことができるようになったので、読書と関連させた活動を多く仕組むことができるようになった。今回の実践「おすすめの本の紹介」もその一つである。

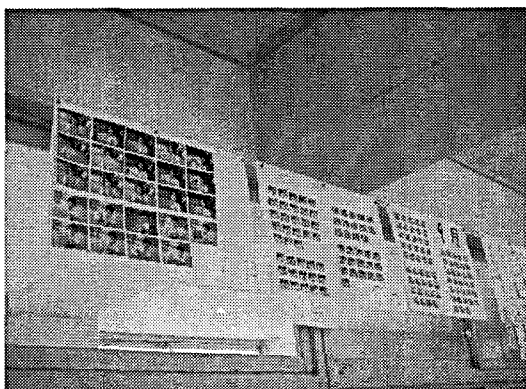


写真1 これまでに読んだ本の写真

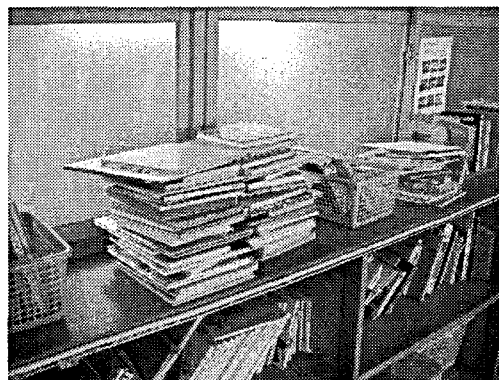


写真2 一ヶ月間に読んだ本

2 実践の概要

(1) 実践の内容

読書活動と関連させた活動の一つとして、相手を決め、その人におすすめの本を紹介する文章を書かせる活動を行った。示した文型は、写真3にあるように、「わたしは、□□（書名）をえらびます。その理由は、□□だからです。」である。

相手として設定したのは、児童の兄弟姉妹や同学年・下学年の児童である。年上の相手を設定したり年下の相手を設定したりすることによって、児童は、相手に合わせたおすすめの本を考え、よりの確なものにしようと考えをめぐらせることができた。

(2) 児童の考えを活かす

はじめに、児童が書いたおすすめの本の理由は、教師の考えた文型を超えたものであった。

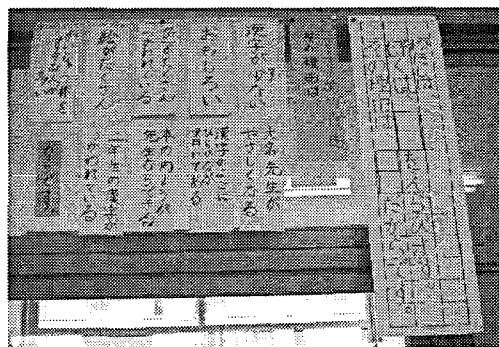


写真3 おすすめの理由

第2学年児童が、弟（2歳年下）に、「宮西達也作かいじゅうのシリーズ」をすすめる。

「ぼくは、『おまえうまそうだな』を選びます。その理由は、弟は、かいじゅうが好きだからです。この本には、かいじゅうがたくさんっています。だから、ぼくはこの本を選びます。」

この児童は、「その理由は、□□だからです。」という□□の穴埋めを、「弟は、かいじゅうが好きだから」と簡単に述べた後、「この本には、かいじゅうがたくさんっています。だから、ぼくはこの本を選びます。」と後を補う文章を自分で付け加えた。

この様子を見ていて、この児童が伝えたかった理由は、教師の提示した型では、答えづらいのではないかと考えた。児童は、簡単に書いたり、それを補足して詳しく書いたりする二つの枠を無意識に使おうとしているのだと感じた。

簡単に	弟は、かいじゅうが好きだから。
詳しく	この本には、かいじゅうがたくさんっている。

当初は、「おもしろい」からという理由も、私は認めた。それは、文字を読んだり書いたりすることが精一杯の児童にはそれで十分だと考えたからである。そうすると、簡単に述べたおもしろい理由を、詳しくの枠で「こういう場面がおもしろいよ。」と本の内容を紹介する文章を文字通り詳しく書こうとするようになっていった。

(3) 重点的に取り組んだこと

上記のような取組みから二つの枠を使って、簡単に書いたり、詳しく書いたりすることが今の児童には、適していると判断し、重点的に取り組んだ。このことは、繰り返して定着させるようにした。

二つの枠	
簡単に	
詳しく	

ポイントは、自分では、「簡単に」と思っている、相手にとっては簡単ではないことがあったり、自分では、「詳しく」と思っている、相手にとっては詳しくないことがあったりすることである。このことについては、児童との対話において解決できるようにした。私が対話を通して、児童の意を汲み取ることで、児童に、自分の言いたいことを理解してもらっているという安心感を持たせることができた。

私は、このポイントこそが、概要から詳細へ説明することの基礎になり、本質的な言語技術になり得るのではないかと考える。概要や詳細と判断するのは、説明する側である。しかし、それらが説明される側にとっての概要や詳細となるのかどうかというと必ずしもそうならないことがある。対話を通してこそ、意思の疎通が図られるのであって、一方的な説明や紹介であってはならないことも、この学習を通して私が学び、指導に活かすことができた。

(4) 一時間の授業の実際

「『理由』の文章を書いて、推敲する。」これは、一時間の授業の学習課題である。実際、この学習課題で、上述のような文量であれば、私のクラスでは、45分間の授業のところ、30分間で推敲までやりきることができるようになった。

児童におすすめの理由を書かせる時は、理由をすばっと簡単に書かせた後に、それだけでは、もう少し足りないことを詳しく書かせるように、教師が意識するようになった。

第3学年児童が、弟（幼稚園年長）に、「絵本 十二支の話」をすすめる。

「わたしは、『十二支の話』を選びます。その理由は、漢字が少ないからです。弟は、漢字が分からないので、漢字が少ないと読めます。だから、この本を選びます。」

この児童も、すばっと「漢字が少ないから。」と理由を述べ、それを補うように一文を付け加えている。

簡単に	漢字が少ないから。
-----	-----------

詳しく 弟は、漢字が分からないので、漢字が少ないと読める。

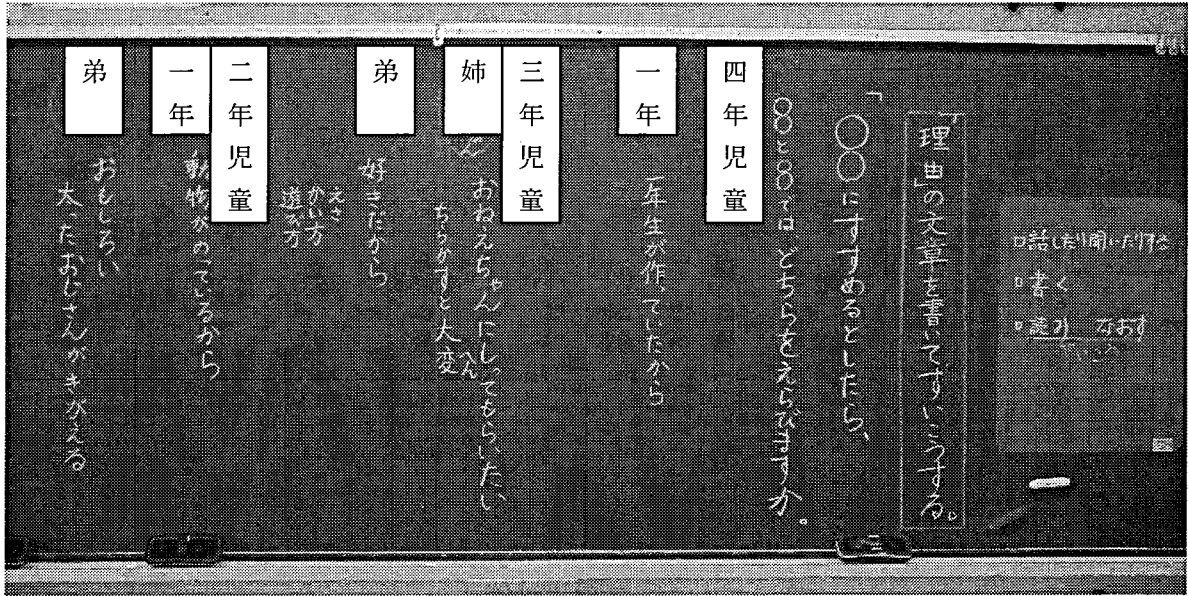
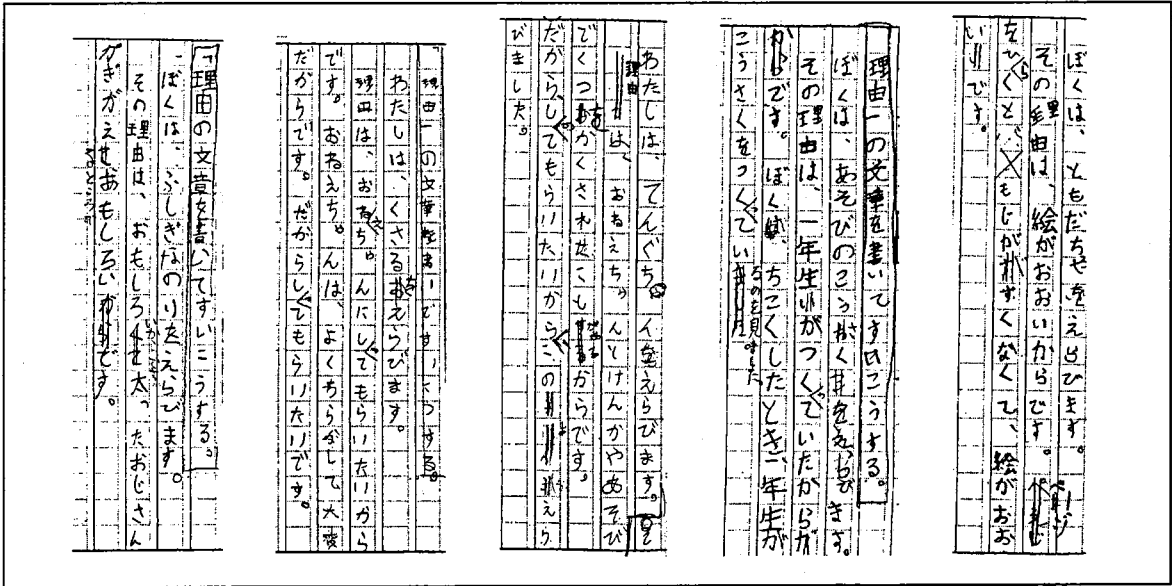


写真4 授業の板書

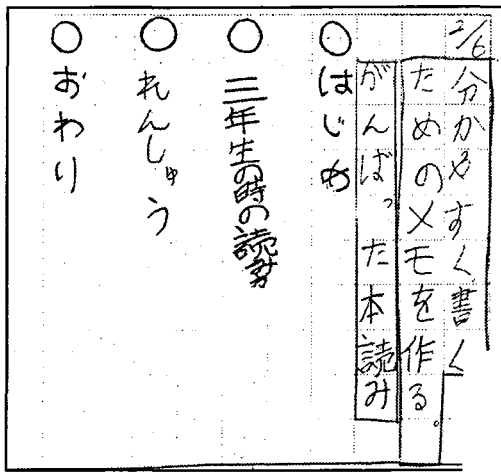


30分間で児童の書いた文章

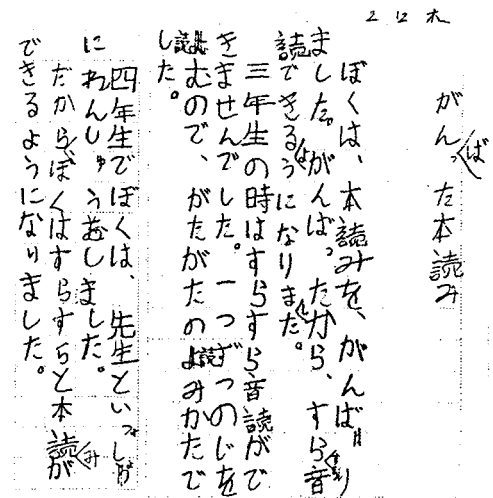
(5) 次へのステップ

今後は、二つのことに取り組んでいく。一つは、理由を複数にすることで説得力が増すようにさせること。あと一つは、これらの学習を組み立てメモ作りにつないでいくことである。

この授業の後、第4学年の児童と組み立てメモを作り、文章を書く活動をしている。児童は、自分の思いを教師に話しながら、組み立てメモを作り、それを文章にすることを楽しんでいる。自分の思いが表現のできることを喜びとして感じながら、自分にもできるという自信を持ちつつある。



組み立てメモ



組み立てメモをもとに書いた文章

この際、注意すべきは、組み立てメモの小見出しである。キーワード的にするのか、それとも一文にするのか、その中間にするのかを児童実態に応じて、変化させることが必要である。

3 成果と今後の課題

(1) 成果

- ・文型を提示することによって、教師のねらう文章と児童の目指そうとする文章が一致し、指導に活かすことができた。
- ・文字を書くことが困難な児童であっても、書かなければならない文章を具体的に理解することによって、書けたかどうかの自己評価が容易にできた。
- ・二つの枠を使って、話したり、書いたりする時に、簡単にしたり詳しくしたりすることができるようになった。

(2) 今後の課題

今後の課題は、理由の「□□だからです。」の□□に入れる児童の語彙を、増やすということである。語彙が広がれば広がるほど表現する内容が広がり、児童が表現したいと思ったことを表現できるようになるからである。

例えば、「4年生のためになる」という理由で工作の本を選んだ場合、「4年生のためになる」という言い回しよりも、「4年生に役立つ」とか「4年生の参考になる」ということばを使った方が、高学年または同学年の児童には、伝わりやすいということもある。また、「読む値打ちがある」という言い回しも考えられる。

そのために今後は次の二点に取り組む。

- ①国語科「読むこと」で、小見出しをつけさせる活動を多く取り入れる。
- ②日常的に記述させる場を増やす。